

国立競技場記念作品等最終保存場所について（案）

国立競技場記念作品等設置等アドバイザー一会議

平成29年11月

目 次

検討経緯	P 2
国立競技場記念作品等の最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方	P 4
基本的考え方の各項目における検討	P 5
配置のコンセプト	P 9
最終保存場所配置図	P 11

検討経緯

改築のため取り壊された国立競技場（以下（旧国立競技場）という。）に設置されていた記念作品等（壁画等25作品）は、主に建設当初から1964年の東京オリンピック開催までの間に、国立競技場を芸術作品で彩るという目的に賛同した寄附者の協力を得て設置されたものである。

その後、約半世紀の時を経て、国立競技場を改築するに当たり、平成25年7月に「国立競技場記念作品等保存等検討委員会」が設置され、同委員会は、同年9月に保存等の在り方についての報告書を取りまとめた。

同報告書では、いずれの作品もこの地の記憶として先人から受け継ぎ、後世に引き継ぐ重要なレガシーとして、改築後の国立競技場（以下「新国立競技場」という。）においても有効活用されることが重要であるとされたことから、最終的な保存場所に設置されるまでの間、移設又は保管されている。

その後、「新国立競技場の整備計画（平成27年8月28日、新国立競技場整備計画再検討のための関係閣僚会議決定）」に基づき、記念作品等の最終保存場所の検討を行うため、平成28年1月に当会議が設置され、当会議では、上記報告書を踏まえ、記念作品等が国民共通の貴重な財産として恒久的に有効活用されるよう、コンセプトや設置方法について、4回の会議を開催して検討を行い、炬火台を除く24作品の検討結果を平成28年10月に中間報告としてとりまとめた。

炬火台（1964年東京オリンピック聖火台）の配置については、「新国立競技場の聖火台の設置場所について」（平成28年4月28日 新国立競技場の聖火台に関するワーキング・チーム決定）を踏まえ、検討を行った結果を報告書に追記し、このたび、記念作品等全25作品についての検討を終えたことから、その結果を最終報告としてとりまとめた。

【アドバイザー】

木島 隆康（東京藝術大学大学院教授） ※座長
工藤 晴也（東京藝術大学教授）
杉山 茂（スポーツプロデューサー）
藤岡 洋保（東京工業大学名誉教授）

【アドバイザー会議の経過】

平成28年

2月 5日（金）国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第1回）

（2月15日（月）JSCが「最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方」を決定）

2月26日（金）国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第2回）

3月 4日（金）国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第3回）

5月19日（木）国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第4回）

平成29年

11月 2日（木）国立競技場記念作品等設置等アドバイザー会議（第5回）

国立競技場記念作品等の最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方

最終保存場所の検討に当たっては、基本的な考え方を以下のとおり整理し、JSCにおいて機関決定された。

国立競技場記念作品等の最終保存場所の検討に当たっての基本的考え方

平成28年2月15日

独立行政法人日本スポーツ振興センター

新国立競技場の建設に際し、旧国立競技場に設置してあった記念作品等（壁画、彫刻及び工作物等、計25作品）の最終保存場所決定の検討に当たっては、専門家の助言をいただきながら、国民の声を聴きつつ、以下を基本的考え方として具体的な検討を進めていくこととする。

- （1） 歴史的及び文化的な価値を継承して、広く国民に伝えられるように場所を選定する。
- （2） スタジアムに保存するものであることを前提として検討し、スタジアムとの調和を図るとともに、記念作品等の特性に応じた適切な場所を選定する。
- （3） 記念作品等の歴史的及び文化的な価値の伝え方について、その内容や方法を検討する。
- （4） 記念作品等の関係者、専門家や国民の声を聴き、決定のプロセスを透明化する。
- （5） 建築構造上、動線上等の安全が確保される設置場所を選定する。
- （6） 復元・修復が必要な記念作品等については、その方法を検討する。
- （7） 上記の検討に当たっては、2020 東京大会以降も見据えて行う。

以上、上記の基本的な考え方を総合的に検討し、最終保存場所を決定する。

基本的な考え方の各項目おける検討

最終保存場所についての具体的な検討においては、上述の基本的考え方の各項目に沿って議論を行い、配置のコンセプトに反映する方向性を整理した。

(1) 歴史的及び文化的な価値を継承して、広く国民に伝えられるように場所を選定する。

【主な意見】

- ・1964年東京大会等の歴史が途切れることなく記念作品等が受け継がれることを確認した。
- ・旧国立競技場では壁画はスタジアムの中に配置され、入場した人しか見ることができなかったが、今回は公開性があり、新たに甦ったものとなっている。
- ・地下2階の壁画設置案について、旧国立競技場から切り取った階段痕のある壁画は、階段部分や断面の処理について検討をする必要がある。
- ・壁画や彫刻は、1964年の思いや時代性が反映された作品であり、当時の今後の日本を背負っていく意気込みを感じる作品である。残すことの意味を見出すこと、「誇り」を守っていくことを伝えるのが重要である。
- ・「残すことは作ること」であり、既存のものに新たな価値付けをしてそれをもとに後世に伝えることなので、そのような文化的価値付けがなされるのが望ましい。
- ・壁画のテーマは、「美と力」、「躍動と希望」といったキーワードが適当であると感じる。
- ・作者のネームプレートは1点ずつ付けた方がよく、旧国立競技場での配置の説明などもあった方がよい。まとめとしては「1964年の作品群」でよい。
- ・スポーツ観戦や散策で訪れた人が接することになる競技場の壁面であるので、作品のタイトルのみでよいのではないか。
- ・設置についての説明は、理由付けを改めて行う必要はなく、作者の名前と生存年の記載があれば十分である。見ただけでも通じるものがあるはずである。
- ・地下2階の壁画設置案については、壁画の切り欠きを免れ、床の切り下げ位置についても揃っており、見やすい設置案となっている。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・(壁画について) 旧国立競技場ではスタジアムの中に配置されていたため入場者しか見ることができなかった壁画を広く公開し、市民が散策できる場所とする。
- ・(銘盤について) 広く市民の方が見ることができる場所とする。
- ・(彫刻品(銅像)について) 広く市民の方に見てもらうためゲート付近に配置する。

(2) スタジアムに保存するものであることを前提として検討し、スタジアムとの調和を図るとともに、記念作品等の特性に応じた適切な場所を選定する。

【主な意見】

- ・周囲の環境に見合った設置場所を選定していく必要がある。

- ・新国立競技場は旧国立競技場とは全く別の建物なので、壁画を旧国立競技場にあった場所に置くことはできないため、壁画に新たな価値を発見して配置を考えるべきである。
- ・壁画については、作品のサイズを勘案し、複数の記念作品を一堂に集め、組み合わせて配置することで、より良いストーリーや新たな価値を見出せるのではないか。
- ・壁画については、高さ8mの壁は他になく、極めて限られた範囲である。
- ・人が手で触れたり、雨が掛かることによる劣化等を勘案し、配置について慎重に検討するべきである。
- ・壁画の個々の並びについては、デザイン、色彩、モチーフ、具象・抽象の組み合わせといたった点は、バランス良く配置されている。
- ・彫刻に関しては、多くの人が見られる場所に配置されるので、作者にとってもよいものとなっている。
- ・出陣学徒の碑と銘盤はよい配置となっている。
- ・壁画について、一望できる環境が整い、狭苦しい感じがなくてよい。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・（壁画について）壁画は、雨、紫外線等の影響を受けやすいため、できる限りこれらの要因を排除できる場所とする。
- ・（銘盤について）旧国立競技場で開催された過去の大規模な大会の銘盤であるため、できる限りひとまとまりとする。
- ・（彫刻品（銅像）について）正面ゲートに配置された象徴的な作品であったため、新計画でも来場者が一番多いと想定するゲートの場所とする。「波」「無題」は、水に関連する作品であることから「水辺の里庭」ゾーンに配置する。「円盤投げ像」「槍投げ像」「御者像」は、それぞれの競技を表現した作品であるためひとまとまりとしてゲート付近に配置する。
- ・（炬火台について）旧国立競技場において、スタンド座席の位置から見る事ができた“野見宿禰”、“ギリシャの女神”の壁画と“炬火台”は1964年東京オリンピックのレガシーを分かり易く伝えるシンボリックなものであるため、この3点を集約し、1つのフレームに収まるような場所に配置する。
ただし、今後、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会における開閉会式の演出上等の関係から、炬火台を活用することが決定された場合は、必要に応じて見直しを図る。

（3）記念作品等の歴史的及び文化的な価値の伝え方について、その内容や方法を検討する。

【主な意見】

- ・レガシーとしてわかりやすい記念作品等の配置案ができています。
- ・地下2階の壁画設置案について、高さ8mの壁画を切り欠くと作品の印象が変わってしまうため、床を掘り下げて切り欠きをせずつけ取り付けるべきである。
- ・やむを得ず切り欠く可能性がある作品については、著作権者に事前に説明をし、理解を得ることが必要である。

- ・東エントランスへの設置案である野見宿禰とギリシャの女神は、角の部分（従前、正面から側面のエレベータに巻き込んでいた部分）までは絵としてのまとまりがあるので残すべきである。
- ・東エントランスへの設置案である野見宿禰とギリシャの女神の側面部分はカウンターが設置されるため、切り取る必要があるが、切り取った部分は組み替えるなどして活用すべきである。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・（壁画について）「野見宿禰」「ギリシャの女神」は、対をなすシンボリックなものであることから正面性のある場所に設置する。
- ・（壁画について）1964年東京大会の時代背景や文化を継承するための重要な資料であるため、ひとかたまりで1964年東京大会を記念できるようなコーナーを配置する。
- ・（出陣学徒の碑）出陣学徒の碑は、当時の入場口があったと思われる場所に設置する。
- ・（炬火台について）極めて象徴的なものであり、レガシー時には象徴的な試合やイベントの際には、点火出来る運用を行う（炬火台の運用については法的確認が必要）。

（4）記念作品等の関係者、専門家や国民の声を聴き、決定のプロセスを透明化する。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・JSCに寄せられた「壁画などの旧国立競技場の遺産は全て新国立競技場に移転すべき」との国民の意見を踏まえる。

【その他】

- ・決定のプロセスの透明化について、JSCから、会議資料及び概要はJSCのホームページにて原則公表する旨の説明があり、了承した。
- ・最終保存場所の配置や方法等の検討状況について、JSCから記念作品等の関係者に説明を行い、理解を得た。

（5）建築構造上、動線上等の安全が確保される設置場所を選定する。

【主な意見】

- ・新国立競技場の運営や人の流れも考慮した上で、配置を詰めていく必要がある。
- ・地下2階の壁画設置案は、地下で空間として暗いのであれば、安全対策上ライトや監視カメラの設置が必要である。
- ・地下2階の壁画設置案の床の切り下げについて、切り下げた部分の清掃などの管理方法を検討しなければならない。
- ・地下2階の壁画設置案については、L字の配置は死角ができ、警備上の支障が生じる可能性があるため、照明や監視カメラの設置等による対策の検討が必要である。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・壁画をはじめとする各作品は重量が大きいので、建物上部ではなく、地上部へ設置する。
- ・運営や人の流れも考慮し、動線を妨げない場所に設置する。

(6) 復元・修復が必要な記念作品等については、その方法を検討する。

【主な意見】

- ・壁画「勝利の場」については、タイルが落ちて状態が悪いため、復元をしなくてはならないレベルである。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・時代背景や文化を継承するための重要な資料であるため、復元・修復の方法について専門家の助言をいただきながら今後検討する。

(7) 上記の検討に当たっては、2020 東京大会以降も見据えて行う。

【主な意見】

- ・彫刻や銘盤などは、現代の新しい作品も設置される可能性があることも考えておく必要がある。
- ・地下2階の優勝者銘盤設置案については、例えば1964年東京大会の優勝者銘盤は左側に寄せて、壁面の真ん中の部分を2020年東京大会の優勝者銘盤のために空けておき、おもてなしを表すこともできるのではないか。

【配置のコンセプトに反映する方向性】

- ・(銘盤について) 2020年東京大会及び大会後においても、世界的な大会が開催されることに鑑み、冗長性のある場所を選定する。

配置のコンセプト

上述の基本的考え方の各項目における議論を踏まえ、記念作品等の最終保存場所の決定に当たっての配置のコンセプトを以下のとおり取りまとめた。

配置のコンセプト

(1) 壁画について

- 旧国立競技場ではスタジアムの中に配置されていたため入場者しか見ることができなかった壁画を広く公開し、市民が散策できる場所とする。
- 壁画は、雨、紫外線等の影響を受けやすいため、できる限りこれらの要因を排除できる場所とする。
- 「野見宿禰」と「ギリシャの女神」
これらの作品は、対をなすもので、かつ、シンボリックなものであることから両作品をひとつのものとして、正面性のある場所に設置する。
- 「よろこび」「躍進」「友愛」「勝利」「より高く」「より速く」「動態」「人と太陽」
「勝利の場」「飛転」「躍動」
1964年東京オリンピックの時代背景や文化を継承するための重要な資料であるため、ひとかたまりで1964年東京オリンピックを記念できるようなコーナーを配置する。

(2) 炬火台（1964年東京オリンピック聖火台）について

- 炬火台は、極めて象徴的なものであり、レガシー時には象徴的な試合やイベントの際には、点火出来る運用を行う（炬火台の運用については法的確認が必要）。
- 旧国立競技場において、スタンド座席の位置から見ることができた“野見宿禰”、“ギリシャの女神”の壁画と“炬火台”は1964年東京オリンピックのレガシーを分かり易く伝えるシンボリックなものであるため、この3点を集約し、1つのフレームに収まるような場所に配置する。
ただし、今後、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会における開閉会式の演出上等の関係から、炬火台を活用することが決定された場合は、必要に応じて見直しを図る。

(3) 銘盤について

- 広く市民の方が見ることができる場所とする。
- 旧国立競技場で開催された過去の大規模な大会の銘盤であるため、できる限りひとまとまりとする。
- 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会及びその終了後においても、世界的な大会が開催されることに鑑み、冗長性のある場所を選定する。

(4) 出陣学徒の碑

➤ 学徒出陣の入場口があったと思われる場所（旧国立と同様の位置）に設置する。

(5) 彫刻品（銅像）について

➤ 「健康美」、「青年像」

旧国立競技場では対をなして正面ゲートに配置された象徴的な作品であったため、新計画でも同様に対をなすこととし、来場者が一番多いと想定するゲートの場所に配置する。

➤ 「波」、「無題」

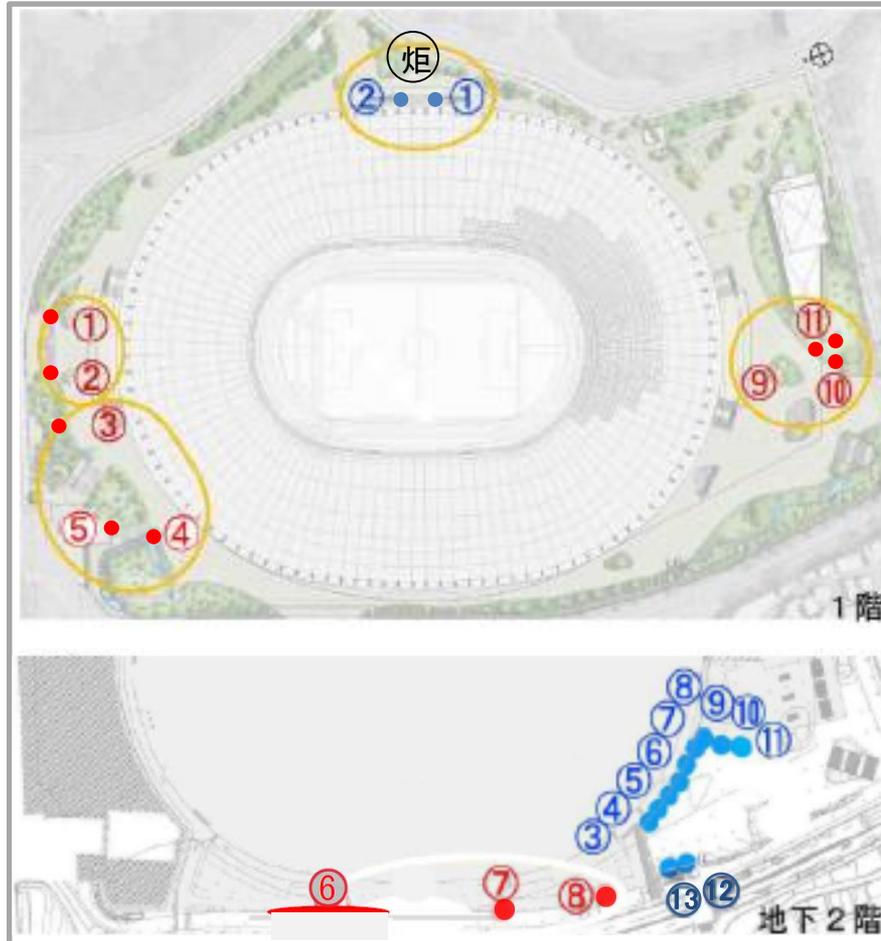
「波」、「無題」とも“水”に関連する作品であることから“水辺の里庭”のゾーンに配置する。

➤ 「円盤投げ像」、「槍投げ像」、「御者像」

それぞれの競技を表現した作品であるため、これらをひとまとまりとして、広く市民の方に見てもらうためゲート付近に配置する。

最終保存場所配置図

記念作品25作品の最終保存場所について、上述の配置のコンセプトに基づき、図のとおり配置することとした。



彫刻・銘盤・記念碑

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
健康美	青年像	出陣学徒の碑	波	無題	東京オリンピック大会 優勝者銘盤	1991年第3回世界陸上競技 選手権大会優勝者銘盤	1967年ユニバーシアード 東京大会優勝者銘盤	楯投げ像	御者像	円盤投げ像
塑像	塑像	記念碑	塑像	彫像	記念碑	記念碑	記念碑	塑像	塑像	塑像
高さ：3m	高さ：4m	高さ：3m	高さ：4m	高さ：3m 幅：1.5m 高さ：0.6m	幅：54m 高さ：2m	幅：5.14m 高さ：2.76m	幅：6m 高さ：2.5m	高さ：3.4m	高さ：2.5m	高さ：2.8m

壁画

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
野見宿禰像	ギリシャの女神像	勝利の場	友愛	より高く	動態	躍動	躍進	よろこび	人と太陽	勝利	飛転	より速く
壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画	壁画
正面幅：4.1m 高さ：4.3m	正面幅：3.7m 高さ：4.3m	幅：8.5m 高さ：8.0m	幅：7.8m 高さ：7.9m	幅：7.8m 高さ：7.9m	幅：8.3m 高さ：7.9m	幅：7.8m 高さ：6.1m	幅：7.8m 高さ：6.2m	幅：3.6m 高さ：6.2m	幅：8.3m 高さ：3.6m	幅：7.8m 高さ：3.7m	幅：8.3m 高さ：3.5m	幅：7.8m 高さ：3.7m